プロジェクト報告

資料を集める、人と向き合う「寺田英子・公宅静江資料」を通じて見る1936年のハイラル

アリウナ・バトエワ
猿　橋　順　子

1．はじめに

本稿は青山学院大学附置国際研究センター（猿橋プロジェクト）で開催した研究会「資料を集める、人と向き合う」（2025年５月31日、於:青山学院大学）における、アリウナ・バトエワ[1)]の発表「寺田英子・公宅静江資料を通じて見る1930年代半ばのハイラルの生活文化」から一部を再構成して報告する。

バトエワが、本報告の中心人物である公宅静江氏（おおやけ・しずえ。1918-2008。旧姓：出野。以下、静江と記す）にインタビューを実施したのは、今から20年以上前の2004年のことだった。静江は、1935年１月から１年半強、満洲国ハイラル[2)]で暮らしていた日本人女性である。バトエワが正式なインタビューを申し込むずっと前から、静江は当時、大阪府茨木市で目と鼻の先に暮らしているバトエワに、古いアルバムの写真を見せながら､彼女がかつてハイラルで暮らしていた時の思い出をことあるごとに語った。静江が他界した後、そのアルバムを含め、静江が保管していた手紙、絵葉書、地図、手記、雑誌等の遺品をバトエワが譲りうけることになった。

静江の記憶に残っているのは、ハイラル滞在中、興安北警備軍顧問を務めていた陸軍

1)　モンゴル語教室ノタック代表。

2)　1931年９月18日、日本の関東軍による満州鉄道爆破を契機に中国東北部の侵略を確かのものとし、1932年に建国された傀儡国家。満州国には、以降多くの日本人が移り住んだ。ハイラルは満州国西方の都市で、日中戦争（1937～）に向かい1936年半ば頃から極めて重要な軍事拠点へと姿を変えていく。寺田英子・公宅静江の両氏は、その直前までの比較的平穏な時期のみを知る日本人女性である。現フルンボイル市。

中佐寺田利光の自宅（「寺田公館」とも呼ばれる。以下、寺田邸と記す）で、長女の英子（てらだ・えいこ。1914年生まれ。以下、英子と記す）と同室で暮らしていた時[3]のものである。バトエワは静江を通じて英子とも親交を深め、英子の没後、知人を介して当時の写真等の資料を譲り受けた。

こうして集まった「寺田英子・公宅静江資料」には、1930年代半ばのハイラルにおける寺田利光を中心とする日本人コミュニティと、ウルジン将軍[4]をはじめとするブリヤート・モンゴル人たちとの交流、草原での生活の様子、衣服や装具、建物や通りの様子、野外での祭りや屋内でのパーティーの記録等が残されていた。バトエワが実施したインタビューによる静江の口述と[5]、二人が残した写真等の資料が補完的に、当時の様相を今日に伝える。これらの観点から、バトエワ所有の「寺田英子･公宅静江資料」は、それぞれ個人が蒐集したものではあるが、満洲国ハイラルにおける当時の日本人女性たちの視点に基づく体験の記録という意味でも歴史的価値をもつ[6]。

発表は、このように時を経てバトエワの元に集められた資料をつなぎあわせながら、1930年代半ばの満州国ハイラルの生活を明らかにしようと試みている研究の一部として行われた。本稿では、続く第２節で静江がハイラルで暮らすことになった経緯を述べ、第３節では日常生活に注目し､寺田邸での暮らしとハイラルの街について､インタビューの語りと関連資料を相互補完的に示す。第４節では､非日常の出来事として「ベルリン・オリンピック出場選手団の来訪（1936年６月24日）」とウルジン将軍の娘に招待されたという「ブリヤート・モンゴル人の「オボー祭り」（1936年６月30日）」を紹介する。最後に、静江がハイラルを去った経緯と戦後の英子との再会、ハイラル会の活動（1976-1997）に触れ､「寺田英子・公宅静江資料」の意義と課題を示してまとめとする。

２．静江のハイラル行き

出野静江は1918（大正７）年10月28日、京都府綾部に父・嘉市、母・トメの長女とし

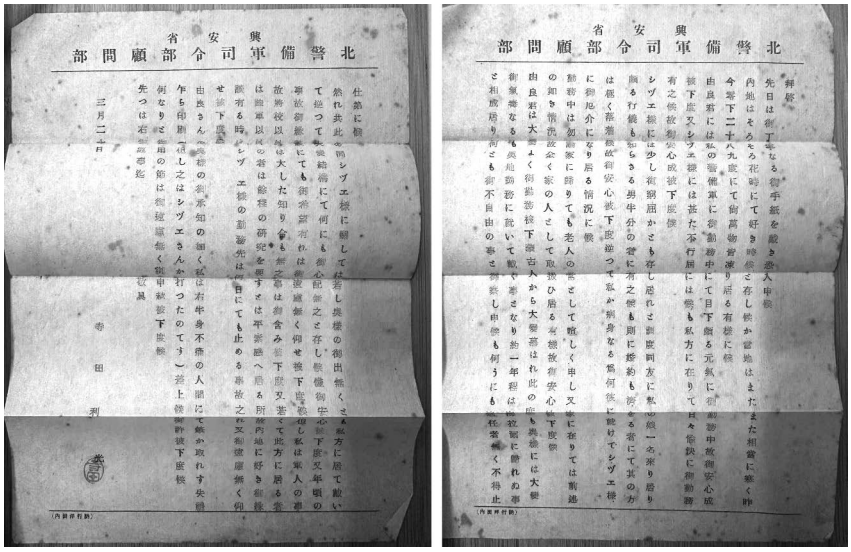
3） 1936年２月からおよそ半年と推定される。
4） ガルマエフ・ウルジン。ブリヤート・モンゴル人コミュニティのリーダー的存在であった。
5） 2004年８月24日実施。許可を得た上で録画した。
6） 以下の記録の中には、武力による植民地支配を行った日本人側の視点として「無邪気」と受け取れる発言も含まれるが、当時10代であった静江の視点と、バトエワとの私的交流の中で生み出された対話であることに鑑み、カギ括弧で囲みそのまま掲載する。なお、本稿にまとめるにあたり、2024年10月からバトエワと猿橋で資料整理に取り組み、発表に向けてのアウトラインを作成。バトエワの発表を録音し、猿橋が逐語録を作成した上で、両者で構成を検討し執筆、編集した。

て生まれた。妹３人と弟１人の５人きょうだいの長女として育った。綾部小学校を卒業後、女学校に進学した。女学校卒業後は生家で家事をしていた。静江が17歳の時、当時、興安北警備軍に勤務していた母方の叔父・由良源造から「一度来てみないか」と誘いを受けた。その頃は「内地から満洲への渡航が盛んな時期」で、静江は以前から「一度赤い夕日の満洲へ行ってみたい」と考えており、即座に承諾したそうだ。

出発前、小沼という少佐が、ウルジン将軍の息子ダシニマとダンバ氏の息子を連れて来日していた。彼らのハイラルへの帰途に同行する形で静江の旅が始まった。姫路までは父親が付き添い、そこで叔父の妻の実家に一泊。姫路駅でダシニマ達一行と合流し長い旅路についた。姫路から下関まで汽車、下関から釜山まで船で渡り、朝鮮半島を北上、鉄道でハルビンへ向かった。ハルビンまでとその先は線路幅が違うため、旅行者は皆、ハルビンで乗り換えなければならなかった。満州里方面への便は限られており、ハルビンで日本式旅館に一泊。そこからハイラル到着まで１週間ほどを要したそうだ。途中、小沼は一等車に乗ったが、静江を含む「子ども達３人」は三等車だった。それでも、「興安嶺で丸焼きの鳥を差し入れられ」るなど「楽しい旅だった」という。

1935年１月13日、真冬の凍てつく寒さの早朝３時か４時頃、暗闇の中でハイラル駅に到着した。叔父の源造が馬車で迎えに来ており、そのまま家へ向かったが、暗さと寒さで周囲の様子はほとんど分からなかったという。その後、源造は奉天の軍学校で講習を受けることになり、妻と子どもは内地へ戻った。ちょうどその頃、顧問部でタイピストを務めていた堀内千代子という女性が結婚退職をすることになり、後任として静江が推薦された。当時タイピストになるには資格が必要だったため、叔父とともに奉天へ行き、タイピスト講習を受けた。しかし修了目前という時に叔父が急遽タウランでの警備任務に就くことになり、静江も奉天を発たねばならなくなった。

ハイラルに戻った静江だったが、叔父が留守の由良宅に一人で暮らすことはよろしくないということで、寺田邸に身を寄せることになった。図１は寺田利光が、京都に暮らす静江の両親、出野嘉市・トメ夫妻に宛てて送った書簡である。静江が寺田の口述に沿ってタイプしたものだという。その後、静江はタイピストとして興安北警備軍顧問部で働くようになる。



北警備 興安軍司令部 省顧問部

仕舞に御
然れ共此の御出無くさえ私方に居て働い
シヅエ様に御して
て呉つても御給料にて何にも御心配無之存じ候
下度又年頃の
事故御歳暮にても御送り被下度候
私は軍人の君
放病院以外の者は絶対に
は出来ず又若て此方に居る
断有る時シヅエ様の勤務先は
せ下度
由良さん
乍ら印刷
何なりご用命
先つは右御報迄
寺田利

北警備 興安軍司令部 省顧問部

拝啓
先日は御丁寧なる御手紙を戴き感入申候
内地はそろそろ花時にて好き時候と存じ候か当地はまだまだ相当に寒く昨
今零下二十八九度にて御蔭様にて元気に居る有様に候
由良君には私の警備軍に御勤務中にて目下働る
被下度又シヅエ様には甚た不行届にて
有之候
シヅエ様には少し前別かされ度同友に
胸る行儀も知らる男半分の君に
は遠く葬送候
下度つて
に御尽介になり居る
勤務中は勿論家に
の如き情況故
由良君は大
御無沙汰なる
断有る時シヅエ様の勤務先は
由良さん
乍ら印刷
何なりご用命
先つは右御報迄
寺田利

図１　寺田利光から静江の両親にあてた書簡（1936年３月20日付）

文中の「由良君」は源造を指す。由良が難局を乗り越え、実直に任務を果たしている旨と、当地ハイラルの厳しい寒さ（氷点下二十八度）が記述されている。また、出野家への感謝と気遣いが綴られている。この手紙が投函されてほどなく、３月29日に叔父の由良源造は外蒙軍の捕虜となり、同年６月30日から７月１日に行われた捕虜交換で無事にハイラルに戻るまで、親族は不安な日々を送ることになる。

３．寺田邸での暮らしとハイラルの街

寺田邸では、1935年の夏、東京で就学中の寺田家の長男、利興がハイラルに滞在し、家族そろって過ごしていた。夏休みが終わり帰京する際、英子も母や弟たちと一緒に帰る予定だった。しかし、寺田氏が「脳出血で倒れ右半身不随」となった。父の介護のために英子だけがハイラルに残ることとなった。このような事情があったから、静江が寺田邸に住み込むことは、英子の話し相手としてもありがたいことだったようである。

インタビューで静江は「寺田さんは終始「何事もモンゴル人の立場になってするように」と説き、モンゴル人の信頼を集め、ウルジン将軍とともに軍務を担っていた」と回想した。英子はロシア語が堪能で、父・利光ともロシア語で会話し、白系ロシア人の友人ともよく交流していた。4歳年上で聡明な英子は、静江にとって憧れの存在でもあった。

「寺田さんの大きな声で目を覚ます朝」もあった。「居候の身」の静江は「眠いなどと我儘を言うこと」は許されない。一週間分の洗濯を終えると、住み込みのロシア人青年シュラーが御者をつとめる「自家用車ならぬ自家用馬車で支那風呂に」向かう。「馬車

に揺られてようやく目が覚める」のだという。

半身が不自由な身となった寺田利光には、「ボーイ」（従者）の周が常に付き添っていた。食事の時間になると料理上手のメイド、マルシャが朝食兼昼食を用意して待っていた。食卓に置かれた「ロシア式のサモワールと大きなガラスコップでいただく紅茶」は、静江にとって最高の贅沢だったという。マルシャの手料理は来訪者の間で評判の味だった。寺田邸は常に訪問客で賑わっていた。

冬になると、一面氷になったイミン（伊敏）川へスケートに出かけた。氷を割って釣りを楽しむ人びとの間を、静江は「スカート姿で滑っては転び、立ち上がって滑ってはまた転ぶ」というありさまで､それは「いつになっても恥ずかしい思い出」だと語った。黄砂の季節が終わり、夏になるとイミン川はプールとなる。泳ぎが好きな人たちは、洗い終わった洗濯物を岸辺一面に広げてから泳ぎに興じる。帰る頃には洗濯物はすっかり乾いていたそうだ。

静江にとって寺田邸での生活は、英子と家事を担いながら、新たな出会いと学びの連続だった。寺田邸には、日本人、モンゴル人、ロシア人、中国人が出入りしており、家の中は常に多言語と多文化が交叉していた。その様子を端的に示す写真（図２）がある。写真の人物に番号を付し、以下に説明を加える。



図２　ハイラルの寺田邸（1936年）

①寺田利光（寺田邸の主人）／②とみ子（利光の次女）／③利興（利光の長男）／④英子（利光の長女）／⑤シューラ（ロシア人従者）／⑥静江（写真所有者）／⑦周（中国人従者）／⑧マルシャ（ロシア人家政婦）

出典：公宅静江氏アルバム所収

寺田は軍服姿で、日本人女性は皆、和装である。背景には大型ラジオや観葉植物が置かれ、和洋折衷の室内装飾から当時の文化混淆が垣間見られる。

以下の図３は、静江が2004年のインタビューの際、ハイラル市街の略図（日中平和調査団（編）2000）のコピーに書き込んだ手書きのメモである。インタビューで語られた場所に番号を付し、語りと併せて紹介する。

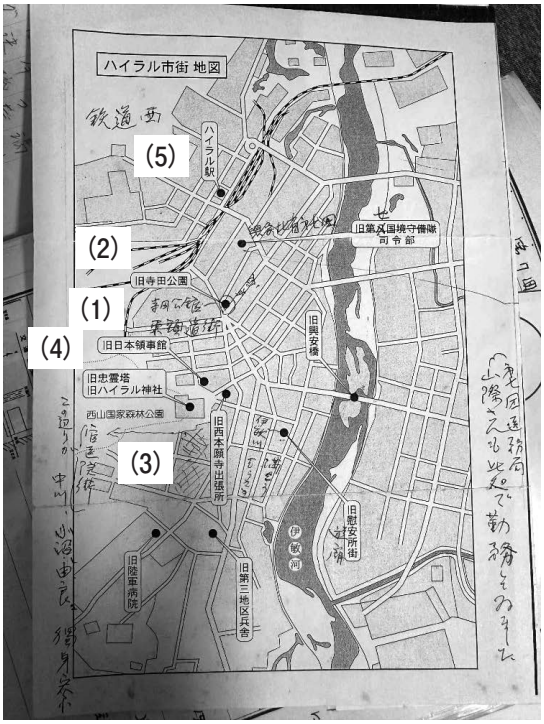


図３　ハイラル市街地図（2000）、静江による書き込み（2004）

地図中央やや左に描かれた「寺田公館」(1) は、静江が暮らした寺田家の住まいであり、生活の拠点であった。その隣には「公園（広場）」(2) があり、静江は夕方になると多くのロシア人が散歩しているのを目にしたという。図中「旧ハイラル神社」とある部分の下（(3) 図中斜線部）に、静江がタイピストとして勤務した「顧問部」があった。その近くには独身寮があり、捕虜となった身から釈放されハイラルに戻った由良源造は、この独身寮で暮らすようになったそうだ。その寮の近くにはウルジン将軍の邸宅もあり、日本人とモンゴル人が集まっては会食する「交流の場」として賑やかだったという。

寺田邸の前を走る「東頭道街」(4) は、市内の主要通りの一つで、商店が軒を連ね駅へと続いていた。「ハイラル駅」(5) は地図の上部に描かれている。寺田邸とイミン川の間のエリアには「ロシア人街」と呼ばれる区画があり、静江はここに暮らすロシア人

家庭を訪ねたり、商店で買い物をした。パンや魚を売るバザー、洋服の仕立て屋などがあった。また、ロシア人の子ども達が通う中学校も寺田邸の近くにあり、時折ダンス・パーティーが開かれ、優雅な音楽がながれる社交場となっていたという。

静江が暮らしたハイラルは、日本人、モンゴル人、ロシア人、中国人が生活する国境都市だった。そして寺田邸は「まさにその縮図のよう」な場所だったという。

4．特別な出来事

4.1　ベルリン・オリンピック選手団来訪

街では話題となる出来事もあった。1936年６月、ベルリン・オリンピックに出場する日本の水泳選手団が、シベリア鉄道でヨーロッパに向かう途中、ハイラル駅を通過するという情報が入った。６月24日、この日は日曜日で、英子と静江は早朝から駅に出かけ、列車の停車時間がたっぷりあることを見越してホームで到着を待った。到着した選手たちと写真を撮らせてもらった。

静江の回想によれば、松沢一鶴ひきいる遊佐正憲、牧野正蔵、小池禮三といった男子選手たちがいた。やはりお目当ては女子選手で、平泳ぎの前畑秀子から日付入りのサインをもらったほか、自由形の古田つね子、飛込競技の大澤禮子、大澤政代、香野昌子からもサインをもらったという。静江は「どれも私の大切な宝物」と言い、これらの品々を丁寧に保管していた。



図４　ベルリン・オリンピック出場の日本水泳選手団とハイラル駅にて。
中央が前畑秀子選手（和服姿）。左端から英子、静江。
出典：公宅静江氏アルバム所収（1936年６月24日）



図５　前列左から静江、英子、前畑秀子選手（和服姿）。
出典：公宅静江氏アルバム所収（1936年６月24日）

4.2　ブリヤート・モンゴル人の「オボー祭り」

ベルリン・オリンピック選手団との記念撮影という印象深い出来事の１週間後、1936年６月30日、英子と静江は、ウルジン将軍の長女ドルゴル氏からブリヤート・モンゴル人の「オボー祭り」に招待された。呼倫ホテルの女将の妹である荻野妙子も招待され、女性たちは連れ立ってでかけた。

この祭りで特に静江を印象づけたのは「子どもたちが下駄を履くように馬に乗って草原を駆けていた」光景だという。続けて、以下のように語った。

> 貴重な財産の生きた羊を一滴の血も無駄なくすばやく解体し、大きな骨付きのままゆで上げる。それを馬乳酒といっしょにご馳走になる。これからの運命も知らず静かにしている可愛い羊の目は年若い自分には少し刺激が強すぎました。夜の草原では星が足元から昇るように見えました。

モンゴルの犬に怯えてゲル（移動式住居）から出られず､助けを呼んだというエピソードも語られた。

この日の出来事は、英子が取材を受け『月刊満洲八周年特輯号』（８月10日発行）に掲載された。誌面には、ハイラル郊外の草原で開催された祭りの様子が描かれ、ウルジ

ン将軍一家と日本人来賓との交流が記録されている。

『月刊満州』に掲載されていたものと、背景や人物配置、服装等から同一と見られる、あるいはほぼ同様の構図の写真を「寺田英子・公宅静江資料」のアルバムから掲載する[7]。



図6 「オボー祭り」

出典：公宅静江氏アルバム所収（1936年6月30日）



図7 「オボー祭り」ゲル周辺

出典：公宅静江氏アルバム所収写真（1936年6月30日）

7） 記者が複数のショットを撮影し、一部を被写体となった英子・静江に渡したのではないかと推察される。撮影者未詳。



図８　「オボー祭り」ゲルの入口前。左から静江、英子、ニナ、妙子。
出典：公宅静江氏アルバム所収写真（1936年６月30日）

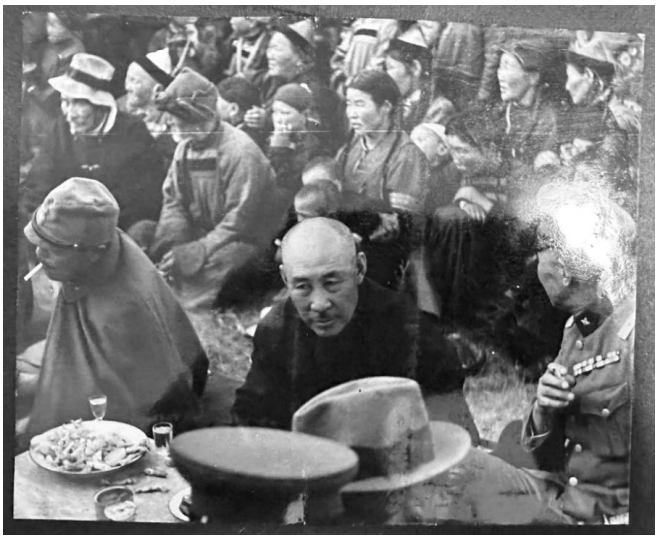


図９　ブリヤート・モンゴル人たちの祭礼
出典：寺田英子氏アルバム所収写真（1936年６月30日）

図６は、「オボー祭り」を遠景に捉えた写真で、雲の広がる草原にゲルが並び、馬とともに歩く人びとや集団で歓談している来訪者の姿が見える。祭り会場の規模と地形が確認できる。図７は、祭りの様子をやや近景で捉えており、人びとが集まり、会話をしている様子が確認できる。和服姿の女性や、周囲に待機している馬車や馬も見える。図８はひときわ印象的な写真で、静江、英子、ニナ（ロシア人）、そして浴衣姿の妙子の

女性４人が並んでいる。帽子やコート、着物の柄など、当時の女性の装いを伝える資料となっている。図９は祭礼の様子で、祭礼僧侶と軍服姿の人物が草原に座り、卓上には料理や酒器が並んでいる。背後にはモンゴル服を着た老若男女が多数座り、祭礼を見守っている。

５．静江の帰国、戦後の再会とハイラル会

叔父の由良が解放されてから間もなくして、静江は病で床に臥す母の見舞いのために一時帰郷することになった。結果的に顧問部でのタイピストとしての仕事を退職せざるを得なくなり、ハイラルを離れることになった。

その後、寺田利光は1937年７月16日にハイラルで死去、英子も日本に帰国した。

昭和51（1976）年、故寺田利光の妻・静香が「世の中も落ち着いてきましたし皆さんで一度集まりませんか」と呼びかけ、かつてハイラルに暮らしていた日本人が、日本各地から会場の奈良に集まった。ハイラル会が結成され、初期には50～60名が定期的に集まったという。ハイラル会は20年以上活動を継続させたが、高齢化に伴い参加者が減少し、平成９（1997）年に解散した。

ある時、ウルジン将軍の息子のダシニマ氏から、かつてウルジン将軍の通訳として働いた岡本俊雄氏に連絡を取りたいと言付かった日本人研究者の報せで、静江もダシニマ氏が健在であることを知った。そこから文通が始まり交流が再開された。その後、ダシニマ夫妻は数回日本を訪れた。ダシニマ氏が通った建国大学（1941年入学）の同窓生の招きで来日した際、静江はダシニマ氏との面会を望んだが、夫妻は多忙で再会はかなわなかった。

ハルビンより先の旅行がまだ許されていなかった1980年９月、かつてウルジン将軍の通訳をつとめた岡本氏はウルジン将軍の遺族と会うべくハルビンへ向かった[8)]。ハイラルからはウルジン将軍の妻メデグ、娘のサンジドマとその子ども、他にモンゴル人が数人、そしてフルンボイルで育てられたという残留孤児の女性が来た。それ以降、その残留孤児女性の肉親探しがハイラル会の活動のひとつとなった。やがて身元が判明し、1983年、静江はその女性の養親とフルンボイルの人びとへ感謝の旅に出た。その後、ハイラルへは３回訪れた。1996年、４度目の旅で静江はようやくダシニマ氏とウランバートルの地で60年ぶりに再会した。

8）その後、岡本は90歳を迎えた年（2003）に自身の体験を資料とともにまとめた『私は果報者です』を出版した。「寺田英子・公宅静江資料」収蔵。

6．おわりに

本稿は、アリウナ・バトエワが2004年に実施した公宅静江（旧姓、出野）氏へのインタビューと、「寺田英子・公宅静江資料」の一部を用いて、静江がハイラルで暮らすことになった経緯から、戦後のハイラル会の活動までのおおまかな流れを示した。インタビューにおいて、「特に記憶に鮮烈に残っている」と語った1936年に静江が体験した二つの出来事（ベルリン・オリンピックの選手団来訪、「オボー祭り」参加）については、両者のアルバムに収蔵されていた写真とともに掲載した。

とりわけ、「オボー祭り」については、当時の雑誌に掲載されていた写真を個人のアルバム写真と照らし合わせたことにより、静江の口述の信憑性が高まっただけでなく、撮影日と場所を特定することができた。その他の写真についても、被写体となっている人の服装や所作から、祭りにおける役割や交流の様子、序列関係や親疎関係などを読み解くことができる。また、物品の配置、ゲルや馬車の位置、人びとの動線などを復元し、祭りの執り行い方や規模、出来事の順序を復元することも可能かもしれない。

ただし、この間（1936年２月から６月にかけて）、静江の叔父、由良源造は捕虜として捉えられており、その奪還のための方策がさまざまに展開されていたこと、その後、国境の街の緊張がまたたく間に高まっていったことを忘れてはならない。あるいは、そうした不安と緊張の中にあったからこそ、２つの「特別な出来事」は、より鮮やかかつ華やかに静江の記憶に残ったのかもしれない。静江たちがオボー祭りに招待されたこの日は「外蒙軍と日満軍の捕虜交換」が完遂された、まさにその日だった。

> 六月中旬、外蒙側から捕虜交換の申し出があり、我が方に抑留していた十二名と外蒙側に抑留されていた日満側将兵十二名の交換を行った。その中に警備軍の岩本中佐と由良上尉が含まれていた。六月三十日と七月一日の二日間で交渉の結果、無事交換を終えた。
>
> 岡本 2003, p.34

静江が保管していたアルバムの中には、当時、静江がハイラルで購入したという絵葉書も多く含まれていた。その中でも「特にお気に入りの一枚」は、写真とともにアルバムに貼られていた。民族衣装をまとってゲルの前に立つブリヤート･モンゴル人女性は、アリウナの祖母ザリマの若かりし日の姿だった（図10）。



図10　アリウナの祖母ザリマ（絵葉書）
出典：公宅静江氏アルバム所収

静江がアリウナにハイラルに関連するすべての記録を託したのは、こうした思いがけない「縁」にもとづいている。時を経て集まった品々、そのひとつひとつに意味があることだろう。これからも、現存する他の資料とも可能な限り照合しつつ、ひとつひとつ内容を精査し、後世を生きるものたちに何を伝えるものであるのかを見極めながら、史料の管理と整理を行っていかなくてはならない。

謝辞
貴重な品々の研究資料としての活用を許可してくださった、寺田英子様と公宅静江様のご遺族に謹んで感謝申し上げます。

参考文献
岡本俊雄（2003）『私は果報者です』実業印刷
小林英夫（2012）「ノモンハン紀行――ホロンバイル平原を旅する」『アジア太平洋討究』20, 243-268.
司馬遼太郎（1992）『草原の記』新潮社
田中克彦（1990）『草原の革命家たち――モンゴル独立への道』中央公論社

日中平和調査団（編）(2000)『ハイラル沈黙の大地――日中戦争の傷跡を訪ねて』風媒社
一橋和宏 (1942)『大草原を行く――ホロンバイル旅行記』教養社
宮脇淳子 (2018)『モンゴルの歴史――遊牧民の誕生からモンゴル国まで』刀水書房
「蒙古包の一夜」(1936, Aug. 10)『月刊満州八周年特輯号』(pp.138-141) 月刊満州社